

[分 類] 普及技術

[成果名] ぶどうのクビアカスカシバ防除にパダン S G 水溶剤が有効である

[要 約] ぶどうのクビアカスカシバ防除にパダン S G 水溶剤の 1,500 倍液を落花 10 日後（果粒の小豆大期）までと 7 月下旬から 8 月上旬（袋かけ後）の 2 回、枝幹部に薬液が十分にかかるよう散布する。蚕に対して毒性があり、水産動植物に影響を及ぼすので特に注意する。

[担 当] 果樹試験場 環境部

[部 会] 病虫部会

1 背景・ねらい

ぶどうのクビアカスカシバは、幼虫が枝幹部に食入する害虫である。被害樹は樹液の流動を断たれるため樹勢が衰え発芽が遅れ、新梢の伸びが悪くなり、幼木に寄生されると枯死することもある。今まで登録農薬がなかったため産地では大きな問題となっていたが、平成 23 年に本剤が登録拡大された。

そこでクビアカスカシバに対する防除効果を平成 23 年に確認したところ、高い防除効果が認められたため、単年度試験ではあるが今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) ぶどうのクビアカスカシバ防除にパダン S G 水溶剤の 1,500 倍液を落花 10 日後（果粒の小豆大期）までと 7 月下旬から 8 月上旬（袋かけ後）の 2 回、枝幹部に薬液が十分にかかるよう散布する。

農薬登録内容

パダン S G 水溶剤

[一般名及び成分含量] カルタップ塩酸塩 75%

[毒性] 人畜毒性：劇物 [魚毒性] B - s 類相当

[対象作物に対する適用登録状況（平成 23 年 9 月 27 日 JPP ネット確認）]

作物名	適用害虫	希釈倍数	散布液量 リットル / 10 a	使用時期	本剤及びカルタップ 塩酸塩を含む 農薬の総使用回数	使用方法
ぶどう	チャノキイロアザミウマ フタテンヒメヨコバイ スカシバ類	1,500倍	200～700	収穫21日 前まで	5回以内	散布

3 利用上の留意点

- (1) 本剤はネライストキシン系に属し経口毒性を有する薬剤なので、食入防止効果を高めるために枝幹部にいていねいに散布する。
- (2) クビアカスカシバ成虫は 6 月から 8 月にかけて発生する。落花 10 日後（果粒の小豆大期）までと袋かけ後の 2 回、枝幹部に薬液が十分にかかるようにいていねいに散布する。使用時期が収穫 21 日前と長いので十分に注意する。
- (3) 果粒の肥大が進んでからの散布によって汚れや果粉溶脱が発生する恐れがあるため、果粒の小豆大期以降袋かけ前までは使用しない。
- (4) 蚕に対して長期間毒性があるので、桑園付近では使用しない。
- (5) 水産動植物（甲殻類）に影響を及ぼすので、河川、養殖池などに飛散、流入しないように注意する。
- (6) 樹勢が弱い場合には薬害を生ずる恐れがあるので使用しない。
- (7) たばこ、なすには薬害を生ずるため、薬液がかからないように注意する。
- (8) ボルドー液と混用する場合は使用直前に混合する。

4 対象範囲
県下全域

5 具体的データ

(1) クビアカスカシバに対する防除効果

ア 平成 23 年に千曲市で実施した試験では、パダン S G 水溶剤はクビアカスカシバに対し、落花 10 日後および袋かけ後の 2 回散布により高い防除効果が認められた(表 1)。

表 1 ぶどうのクビアカスカシバに対するパダン S G 水溶剤の防除効果(平成 23 年、果樹試験場)

供 試 薬 剤	希釈倍数	散布時期	虫ふん排出孔数	薬害
パダン S G 水溶剤	1,500	6/29 + 7/26	1	なし
		7/26 のみ	16	なし
無 処 理		-	17	

試験方法：千曲市上山田現地ほ場。発生程度は少発生。供試樹は「ピオーネ」短梢せん定、成木。1区1列(約 40 m)3 反復。平成 23 年 6 月 29 日(落花 10 日後)、7 月 26 日(袋かけ直後)に動力噴霧機を用いて十分量を散布した。展着剤は加用しなかった。

調査方法：9 月 21 日(7 月 26 日散布 57 日後)に主幹及び主枝全体を肉眼で観察し、虫ふん排泄孔数を計数した(区合計)。薬害は達観調査による。

イ 平成 23 年に中野市で実施した試験では、パダン S G 水溶剤はクビアカスカシバに対し、落花 10 日後および袋かけ後の 2 回散布により高い防除効果が認められた(表 2)。

表 2 ぶどうのクビアカスカシバに対するパダン S G 水溶剤の防除効果(平成 23 年、果樹試験場)

供 試 薬 剤	希釈倍数	散布時期	虫ふん排出孔数	薬害
パダン S G 水溶剤	1,500	6/30 + 8/2	1	なし
		8/2 のみ	7	なし
無 処 理			13	

試験方法：中野市長嶺現地ほ場。発生程度は少発生。供試樹は「巨峰」中梢せん定、成木。1区1樹4 反復。平成 23 年 6 月 30 日(落花 10 日後)、8 月 2 日(袋かけ直後)に動力噴霧機を用いて十分量を散布した。展着剤は加用しなかった。

調査方法：9 月 21 日(8 月 2 日散布 50 日後)に主幹及び主枝全体を肉眼で観察し、虫ふん排泄孔数を計数した(区合計)。薬害は達観調査による。

(2) ぶどうに対する薬害

いずれの試験においても、ぶどうに対する薬害は認められなかった。

(3) 散布時期による果粒の汚れ及び果粉溶脱

落花10日後の散布により、軽微で実用上問題がないものの果房の汚れまたは果粉溶脱の発生が認められたため、本剤は落花10日後以降袋かけ前までは使用しない(表3)。

表3 散布時期がぶどう果房外観に及ぼす影響(平成23年、果樹試験場)

供試品種	果粒の汚れ、果粉溶脱の指数別該当果房割合(%)													
	薬害	6月29日散布(落花10日後)						薬害	7月15日散布(袋かけ直前)					
		汚れ 1)			果粉溶脱 1)				汚れ			果粉溶脱		
	0	1	2	0	1	2		0	1	2	0	1	2	
巨峰	なし	0	100	0	0	100	0	なし	0	0	100	0	0	100
ナガノパープル	なし	0	100	0	0	100	0	なし	0	0	100	0	0	100
ピオーネ	なし	100	0	0	100	0	0	なし	90	10	0	90	10	0

1) 汚れ及び花粉溶脱の調査基準

指数0: 汚れまたは花粉溶脱の発生なし

1: 汚れまたは果粉溶脱の発生は見られるが軽微で実用上問題がない

2: 汚れまたは果粉溶脱の発生により実用上問題となる

試験場所: 千曲市上山田現地ほ場

供試品種: 「巨峰」「ナガノパープル」「ピオーネ」 1区10果房

薬剤散布: 平成23年6月29日(落花10日後、小豆大期)及び7月15日(落花26日後、袋かけ直前)にハンドスプレーを用いて十分量を散布した。展着剤は加用しなかった。風乾後に果実袋により被袋し、試験薬剤以外による果房外観への影響を回避した。

調査方法: 平成23年9月8日に薬害発生の有無、果粒の汚れ、果粉溶脱の発生程度を調査した。

6 参考データ

(1) クビアカスカシバ成虫の発生時期

フェロモントラップ調査によるクビアカスカシバ雄成虫の発生時期及び薬剤散布適期を図1に示す。

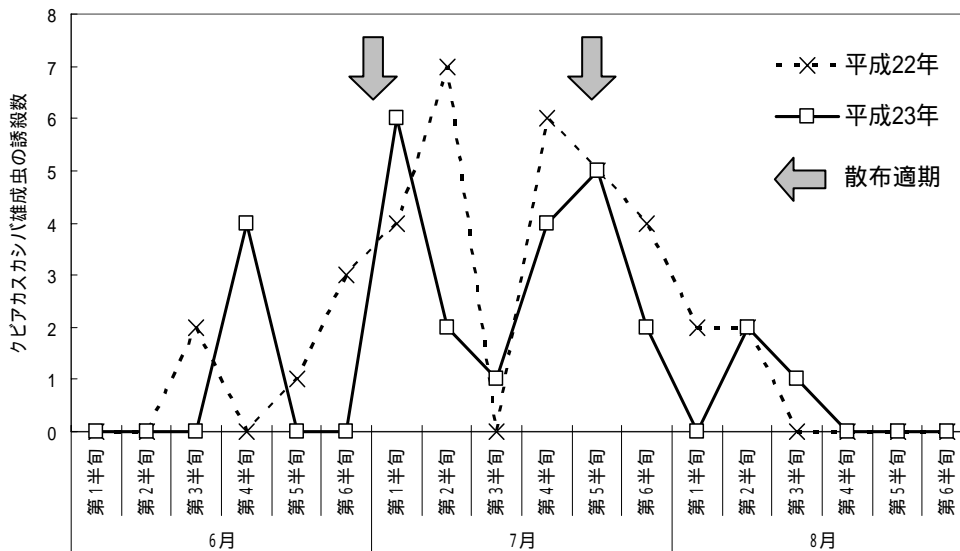


図1 クビアカスカシバ雄成虫の発生時期(平成22~23年、高山村ぶどう園)

7 その他特記事項

[公開]制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の新規農薬等の効果試験、平成23年度(2011年度)、民間受託